

親の教育に関する研究

——集団討議における場合——

小西勝一郎・細見幸子

A Study of Education for Parents on their Child Rearing.

Mainly on the group discussion of Parents.

KATSUICHIRO KONISHI · SACHIKO HOSOMI

問 題

近年、乳幼児の発達ないし幼児教育の研究の進むにつれ、施設保育のあり方とともに、乳幼児に対する家庭又は親の重要性がみなおされ、ひいては家庭の教師としての親の教育が再発見されてきている。

この背景には、米国における子どもの認知発達に関する研究と恵まれない子のための教育的努力の大きい貢献がある。ヘッドスタート・プログラムでは遅すぎることに、恵まれぬ子への補償教育は早期から継続して行なう必要があること、そして乳幼児の教育の中心となる親のための教育が重要と考えられ、そのためのさまざまな実践的試みがなされてきている。Frost, J. L. によれば、今日はすでに、両親への教育的介入の効果の有無よりも、その介入の方法について検討されねばならない段階にあるという。

Bronfenbrenner, U. は幼児の集団場面への教育的介入と家庭へのそれに関する文献を調べ、早期介入教育は家族を含めてなされないと成功に乏しいこと、またたとえ効果があっても、介入が継続しないと効果が消失すること、生態学的介入（適切な健康上の世話養育、住宅、親の雇用の機会と経済的安定など）の必要なことをのべ、子どもの発達段階に応じた親のもつ役割を示唆している。つまり子どもの健康な発達には、集団教育施設と家庭とが互いに分離せず一体として働く必要があることがわかる。さらにそれはSchaefer, E. S. のいうUrEducationもしくはFamily and Community-Centered Educationの構想にも当然いたるであろう。

家庭教育とか両親教育の重要性はなにも今日に始まったことではない。わが国においても戦前はいうまでもなく戦後の歴史からみて、教育基本法第7条に家庭教育振興の条文が設けられ、国や地方公共団体その他によって多くの施策や研究がなされてきている。しかし上述のような家庭を含めた新しい教育の考え方は、はからずも

コメニウスが指摘したように、すべての家庭を学習センターとみ、教育施設としての学校と考えられること、ひいては学校教師としての立派な親の育成に努力されねばならないと思われる。

かつてBrim, J. R., O. G. は親の教育を成人教育の一部とし、「教育的技術を用いて親の役割実践に変化を与えようとする行動」と定義し、親の教育の目的、内容、方法などについて組織化を試みた。しかし親にもさまざまなタイプがあり、親のもつ問題や要求も多様で、親の能力にも差があるから、親の教育が効果的であるためには、これら親の条件、その求める内容、教育可能性などに応じた適切な計画がさらに検討されねばならない。Brimは当時迄の研究資料について、なお客観的なものが少ないと指摘しているが、それは今日においても多分にあてはまるところがあると思われる。

以上の立場になって、筆者らはSchaefer や Levens-tein, P. などの研究にそって、個別的な親教育介入への試みを計画しているが、まずその手係りをえるため、必ずしも乳幼児の母に限定しないで、母による集団討議を通じ、子どもの教育に関する母のもつ要求と意識を探り、今後の計画の基礎知識をえようとした。本報告はその意味で、筆者らが始めて試みた集団場面における母との会話のまとめである。

なお本研究には筆者らのほか、当研究室のスタッフ（大学院生を含む）、M幼稚園の諸先生の協力をえた。研究に参加された母親の皆さんにも心から感謝の意をささげたい。

研究対象

どんな親を教育プログラムの対象とするかについては、親の社会経済的要因、性別、子の年齢、教育技術のタイプなどの条件を考慮して決めねばならないが、本研究ではこれらの条件を特に考慮せず、2名の母を除き当学部近辺の母を対象として選んだ。これをまずa, cの2群

にわけた。a 群は2つの幼稚園と1町内会を通じて募集した母からなり、c 群はM幼稚園に通園する幼児をもつ母から募集したものである。a 群の登録者は22名であったが、毎回5～6名の出席が多く、第2年目に入ると（これをb 群とする）出席者が少なく固定している。c 群は平均10～15名の出席がみられた。

a c 両群の母の諸条件について調査を差控えたが、討議内容と一般的雑談のうちから推定すると、中学性をもつ1人の母を除き、ともに幼稚園児をもち、さらに幼い乳幼児とか小学性のきょうだいを持つものが多い。傾向としてはa 群の母に年長の子をもつものが多い。b 群はa 群の第2年目にあたる関係から小学性をもつ母が自ら多くなっている。また母の学歴については、両群とも高校卒が多く、短大、大学卒の母も若干みられた。家庭の職業は公務員、会社員、自家営業など、いわゆる中流クラスを代表する母親たちと思われる。なお彼らの教育的関心については、積極的に募集に応じ討議に参加してくれた人たちであったから、この点教育に大きい関心をもってしていると推定されよう。

研究 方 法

親の教育の方法はその対象や目標の特殊性により、また集団の大きさなども考慮して選ばれる必要があるが、ここでは集団討議の方法によった。それは、他の教育技術にくらべて、最も効果的なものの一つと思われたからである。母のみならず、筆者らのほか研究室のスタッフ、c 群ではさらに幼稚園教師も随時出席し討議に加わった。

母の募集にあたり、パンフレットによって、母親同志がその経験から、自由に子どもの問題を話しあい、研究し、啓発しあっているという趣旨をのべたが、最初の会合に際しこれを再び説明し、爾後の会合のあり方の理解を求めた。すなわち討議は出来るだけ母の発言を大切にし、母同志の話しあいを第一に尊重しながら、また母の疑問に対しては問題を説明し、鮮明にするなど教官側の適切な示唆も心がけ、討議が進展し、母の洞察を深めるようつとめた。

a 群では第3回目の会合から次回の会合の案内書に、討議テーマを記入する方法をとったが、これには母の討議の中から次回のテーマがしばられることも少なくなかった。しかし討議にあたっては、必ずしもテーマにとらわれることなしに自由な発言をなすよう常に注意を行っている。b c 両群も自由討議の方針はa 群と同じであったが、前もってテーマを通知せず、会合の始めに教育映画をみせ、これを手係りに話し合いを進めるよう示唆した。用いた映画は山下俊郎監修、文映教育映画社製作

のもので、次の題名のものである。すなわちb 群では、「情緒の発達」、「社会性の発達」、「運動の発達」、「家族関係」、「遊び」、「興味の発達」であり、c 群ではb 群の家族関係と社会性を除き「思考の発達」を加えた。それぞれ約15～20分の上映時間である。なおa 群に事前通知したテーマ名は、「遊び」、「マスコミ」、「賞罰」、「母性とは」、「性教育」、「子殺し」、「問題の子」、「親子関係測定」、「家庭のあり方」であった。結果の整理にはテーマを与えなかった会合の資料1回分が加えられている。

討議内容はテープレコードし、結果の分析を行なった（録音できなかった会合分は除いてある）。

a b 両群は当研究室の一つにおいて、c 群はM幼稚園の階上の一保育室において討議された。事情の許すかぎり毎月1回土曜日の午後2時から4時迄会合した。

会合期間はa 群が昭和48年4月から翌49年3月まで、b c 両群は昭和49年4月から50年3月までの間である。

結 果 と 考 察

子どもの教育に関する母親の意識と関心を探るため、テープレコードした母の自由討議の内容を分析し、ついで条件を異にするa b c 3群の比較を試みた。

I 討議内容について

長時間にわたる討議内容をここに逐一のべることはできないし、その一部のみをあげても、かえって前後のニュアンスが失われやすい。ダイナミックな会話のことであるし、ある話題も他の母の発言により、簡単に別の話題に転じ、混合し、元に戻り、また質問や意見や批判や反省、そして体験の斜述など、さまざまな波をうって討議が展開したからである。討議に十分な訓練をうけていない母達であったからと思われる。また筆者らもリーダーとして、適切なりードをなしえなかったことを大きく反省しなければならぬ。ただ、討議がはばどんな経過をとって進んだかについて、2会合のあらましをあげておきたい。

性教育をテーマとした例（a 群）

話し合いはある母の質問から出発した。小学4年の女の子をもつこの母は、たまたま生理に関する子どもの質問にとまどい、どう説明すべきかと疑問を提起してくれた。これを契機に性教育とは何か、男子の性教育について、学校での指導方法、家庭の指導方法などについて、他の母親たちが自らの経験と実践を紹介しながら、かなり深く長く論議がなされた。この際筆者らはむしろ控え目に発言したが、性教育について必要なアドバイスと資料を提示した。こうした討議の過程で、母達はそれぞれわ

が子の年齢と考えあわせ、わが家の性教育のあり方にふれ、最後に、これまでの性教育に対する考え方、いわば性教育即セックスに結びつける見解を改め、人間としての広い意味での家庭のしつけなども含まれることが理解できる発言がみられた。結局始めに問題提起した母もわが子に対しどうあるべきかという確信にいたり、それを実行しようという意味の表明がみられた。

問題児をテーマにする会合の例 (a 群)

まず筆者の一人が問題児について一般的解説を行なったが、問題児の原因、家庭環境の重要性について母の理解を深めたと思われる。また問題児に対する一般的意識として、親はわが子だけに注目し、問題児に対し無関心になりがちなこと、同情ではなく、いたわりと理解をもち、見守っていく姿勢が必要ではないかと発言あり、また問題児に対する指導法として、家庭と学校や相談機関との協力の必要性にも言及されている。こうして、ある母からPTAだよりなどで、親と教師はよく連絡をとりあうよう指導がなされるが、実際は親と教師の話しあう機会がなく、十分連絡できない不満に話題が転じ、教師と学校への批判もみられた。さらに話題は展開し、どうすればわが子の成績が上がるかという、子どもの勉強について話しあいが集中していった。小学1年で下校後勉強しないで遊びはおける子をどう導くか、その接し方について、他の母親それぞれ経験談を交えながら議論が白熱していった。子どもの勉強について親はやかましくいわないで、教師にまかし、子の自主性にまづがよいという見解から、さらに宿題、ランドセル廃止の例が話題となった。

前者の例から、性教育という家庭で実践したがい問題について、比較的長い討議のうちに問題提供した母親の納得していく過程が理解されるが、母同志の経験の紹介や自由な討議が大きい効果をもっと推定できそうであった。もちろん前者の例において、とくに後者の場合よく解るように、討議は特定のテーマのみに集中したのではない。他の関連する問題の提起や、飛躍や断絶もある。また全ての母が完全な了解に達し、意見の一致、確信にいたらない場合も多かった。たとえば了解したとしても、それが家庭での実践につながるかどうか疑問もあろう。ただわれわれはこの点そうあることを期待しつつ、さらに将来の検討にまちたい。なお第2の例で、話題が問題児から勉強へと大きく転換したのは、出席した母親の興味関心の強い方向を示すものであろう。

質問について

次に親の関心は最もよくその質問に現われると思われるから、次にその代表的なものをみておきたい。表1に

表-1 母の質問の例

項目	質 問
養育指導に関するもの	<p>子どもに圧力をかける方がよいのではないか。 きょうだい問題をどう扱うか。 上のきょうだいは下のものの面倒をみるべきか。 風呂に何才まで一緒に入るべきか。 親が怒ってはいけないか。 幼児期やさしかった子が赤軍になるのは何故か。 小学4年までの叱り方はどうか。 性教育は必要か、オープンがよいか。 子どもの性の疑問をどう説明するか。 青年期の反抗をどう扱うか。 可愛がって育てるのはよいか。 親は子に期待をかけていけないのか。 行儀作法で男女の差はおかしいのではないか。 大きい声で叱るのと黙って叱るのとではどちらがよいか。 お年玉の額は、小遣いの額は。 むだずかいを注意すべきか。</p>
勉強に関するもの	<p>宿題を注意しなくてよいか。 勉強は子どもの自主性にまかせるべきか。 本の読み方はどうか。 進路は誰が決めるのか、相談相手は。 教科で得手、不得手があるのは何故か。 宿題をさせるとき親がそばについていることは。 宿題をまちがったまま学校にもっていくことは。 宿題廃止は低学年も高学年も可能か。 おいつけない子はどうしたらよいか。 塾は何か効果があるか。 中学生は塾より家庭教師か。 何学年から塾に行けばよいか。 学習内容はどのように変えるのか。 家業と進学をどう指導するか。</p>
遊びに関するもの	<p>友人関係でどんな遊ばせ方をするのがよいか。 年上の子と同年令の子とどちらと遊ばせるか。 遊びの時間はどうか。 遊びの片付けはいつから教えられるか。 夏休みの遊をどれほど制約するか。 玩具のとりあいでけんかをやる指導法は。 玩具の価の高低の基準は。 他の多くの玩具をもっている。我が子にもそうさせるべきか。</p>
学校に関するもの	<p>ランドセル廃止は教師として授業しやすいか。 受験制度はかわらないか。 地域選抜制はよいのか。 教科書の内容がむづかしいのではないか。 私立の学校に行かせるのはどうか。 夜間中学とは。 3年保育と2年保育とどう違うか。</p>
その他の	<p>子ども殺しは昔からあったか。 子ども殺しの母の相談相手はないのか。 子どもをすりかえられたらどうするか。 学校に何故行かむばならないかと問われて。 非行その他の問題児の原因は。 問題児の勉強はどうか。 最近の問題青少年の情緒はどうか。 子どもを社会の子と思って育てている人がいるか。 わが子として育てていることは悪いのか。 人間らしい人間教育の方針は。</p>

示す通りである。これらは討議の内容、進展の状況と切り離しえないものであるが、養育指導、勉強、遊びなどに関するものが多い。日常直面する母親の苦心が率直に示されている。Schaefer は母の指導者として幼稚園や保育所の教師の役割を強調するが、これらの質問に対しよきアドバイスを与えたいものである。なお質問はすべての母が行なったわけでもないが、特定の母の質問であっても、同席するすべての母に共通するものとして、ともに考え討議なされている。

II 討議内容の分析

討議内容をどう分析するか必ずしも容易でないが、村山貞雄の父母の会における質問の分類を参考としながら、ここでは、討議の発展に関連すると思われるものを中心に、発言を1つ1つチェックし、筆者ら2名にて検討しあいながらまとめた。第2表はこうしてえた10の分類項目を示したものである。表中の数字はチェックした発言総数に該当項目の数を除した百分比である。これらの項目間にオーバーラップするところも多分にあるが、母の討議の過程でどんな内容がみられたかおよその見当がつこう。なお表の頻度は全会合の討議を合し、また母と教官らの発言を区別していない。両者を切りはなして討議の進展は考えられないからである。

表によると、養育指導に関する発言が最も多く、29%をしめるが、これには単なる養育指導の発言のほか、賞罰、親子関係、きょうだい関係、女子と青年の教育、性教育、日常習慣、小遣いなどの指導のあり方にふれるサブ項目を含めた。すべて養育指導に関連するが、その内容が多様であり、頻数が多かったのも当然推量されともいえそうである。具体的には家庭での親の養育しつけの様子、叱り方はめ方、子どもの人格を傷つける言葉や態度、子どものとらえ方、反抗、後片づけ、行儀の悪さ、しつけの意味、規則正しい生活の指導法、思春期の性の導き方、女子の生理の指導、親の性に関する意識、小遣いやお年玉の与え方などについていろいろな表現で言及されている。

第2に多い内容は勉強に関するものであり、勉強、習いごと、塾、進路、読書、知的発達に関するサブ項目をまとめたものである。勉強は小学生をもつ母の大きい関心であるが、具体的には、家庭学習のあり方、宿題の是非、勉強しない子、塾について、勉強放っていてよいのか、自立性をもたせるには、成績が悪い、絵本の選択法、絵本のストーリーが原作と違う場合などが話題にのぼっている。

遊びに関する発言は12%で第3位であった。その具体的発言としては、遊びの内容、玩具の買い方、遊び集団、

表-2 討議内容と頻度 (%)

グループ 内容	a	b	c	計
養育・指導	34	27	26	29
勉強	20	29	6	20
遊び	7	4	39	12
マスコミ	6	0	0	3
子殺し	8	0	0	4
問題児	7	6	0	5
父母のあり方	3	11	4	6
学校問題	2	11	0	4
発達特性	1	8	21	8
その他	10	4	0	6
発言総数	1602	956	659	3217

遊び場、遊びの意義、体を動かして遊ばない、遊びほおける、遊びの指導方法などがみられた。とくに幼児をもつ母によって関心が多く払われている。

マスコミ関係では、テレビの影響、こども番組、チャンネル権、テレビの見方、戦争番組、テレビと読書、マンガ、CMの時間帯などの発言が多くみられた。また問題児では、問題児の原因、親の意識、障害児の指導方法が、子殺しでは親の感想、コインロッカー殺し、ハイティーン批判などに言及されている。学校問題には、ランドセル廃止論、テスト中心の教育、小、中学校の教育方針、教師の家庭学習への態度、教師と親とのつながり、授業参観の問題、受験、高校選抜、学区制、政治、社会の責任、保育施設の内容など、教育に関する母の見識の一端が示されている。さらに父母のあり方については、母性愛とは、愛情とは、赤ん坊すりかえ事件、親子心中、女性の生き方、理想の父母、育児と主婦の生きがいなどが言及されている。

発達特性については、知的発達以外の心身の各領域の発達に関するものが含まれ、その他項目は、理想の子、家庭生活、同和問題、老後、近所づきあいなどのサブカテゴリーに分けられる。

以上便宜的におけた10項目の内容からしても、一般に示される親の教育計画にあげられる内容が、頻度の大小を問わず見出され、本調査の対象となった親にも、これらの問題は大きい関心を示しているといえそうである。

次にa b c 3群間の討議内容の特性をみると、第2表から、養育指導に関する発言は3群に共通して多いといえそうだが、a b 両群では勉強が、c 群では遊びと発達特性に関する発言が多くなっている。これは先にみたa b 群とc 群の母の子の年齢の違いによって、討議内容の

関心の違いを示すものといえそうである。つまり子ども
の年齢要因も討議内容と切りはなして考えられない。

またc群よりb群に、b群よりa群に、たとえ数は少
なくとも、広範囲にわたる項目への言及が目につく。こ
れにはとくにa群において会合回数が多かったこと（テ
ーマの設定が多いこと）にもよるが、討議の場である研
究室が、幼稚園長その他の教師の出席した園の保育室よ
り、より自由な討議の雰囲気をかもした理由によるかも
しれない。つまりできるだけ自由な雰囲気をつくること
が、討議の内容を広く豊かにするといえないであろうか。
なおb群ではa・c両群以上に勉強、学校問題、父母のあ
り方の項目が多くふれられている。b群がa群の母から
さらに固定化した小数のメンバーとなったため、これら
の母の興味と関心がより強く特殊化したものと思われる。

III 発言の種類と発言者

これまで発言内容を全体としてみてきたが、発言者にも母と筆者（教官）らの違いがあり、発言にも質問、意見、批判、経験の叙述、その他が数えられる。これらの違いをさらに検討してみよう。

第3表によると、全体として、教官の発言が40%、母の発言が60%を示し、相対的に母の発言が多いことは、自由討議の主旨にそう方向を示している。教官が質問したのは僅かであり、その発言は説明とか、リードのためのものであった。しかし母の発言も3群間では同じでなかった。母の発言はa群に多く、b・c群とくにc群では教官のそれが優位を占めている。これは自由討議を中心としながら、実際には先にふれたように、c群の会場設営の特性、また会合に対する母の態度の硬さ、多数の出席者などの条件を考慮しなければならない。これらの条件と関連して、教官側もどちらかといえばレクチャー的色彩を増したと反省の余地が少なくない。

母の発言種別のうち最も多いのは、問題に関連して自己の経験をのべるものであり、次いで意見、質問の順となっている。その他の発言には批判や反省なども含まれ

るが、その数は少なかった。

3群間の母の比較では、質問はa・b・c群の順に少なく、意見はa・b群が多く、c群は少ない。これに対し経験の叙述はc群が多くなっている。また批判的期待的発言はa・b両群にみられるが、c群には皆無であった。これはa・b群の母が比較的自由に、積極的に討議を行なったに対し、c群では固定的受身的であったことによるのではないと思われる。質問や意見や批判はそれを受けいれる自由な思考の雰囲気が必要と思われるからである。

なお討議内容の項目と各発言の種類及び発言者との関係をみたものが第4表であるが、3群間で必ずしも特定の傾向を示すとはいえないようである。

IV テーマ及び映画について

会合に先だち通知したテーマ（a群の場合）と会合に際し上映した映画（b・c両群の場合）が討議内容にどう影響したかを明らかにするために各群の討議内容（サブ項目を含む）のうち、テーマ及び上映題名に合致するものがどんな地位を占めるかを調べた。

a群においては、マスコミをテーマとした会合の討議内容のうち、同テーマに関する内容項目は6項目中第1位にあり、同じく賞罰のテーマにては5項目の内容中第3位、母性愛のテーマで6項目中第4位、性教育のテーマで3項目中第1位、子ども殺しのテーマで7項目中第1位、問題児のテーマで5項目中第2位、家庭生活のテーマで3項目中第1位をしめていた。またb群では上映題名、運動の発達にて、運動に関する発言頻度は5項目中第2位、遊びの題名で6項目中第2位、家族関係の題名の会合で5項目中第1位、情緒の発達の題名で8項目中第4位、社会性の発達の題名で5項目中第3位をしめていた。さらにc群では、情緒の発達、2項目中第2位、運動の発達、5項目中第3位、興味の発達、5項目中第1位、思考の発達の題名で3項目中第3位であった。

テーマや映画にとらわれず自由討議をたてまえたためであろうが、上述のようにこれらの刺戟が常に第1の関心をもって討議されたとはいえない。殆んど関心の払われなかったものもあり、とくにそれは上映映画のうちに多いことは考えさせられるところがあった。しかしこれらが全く無視されたとはいえないし、上位をしめるものも少なくないことは、テーマや映画による刺戟が話題の発展に有効であることも忘れてはならない。またこの際における教官側のより積極的な解説を加える必要があったと痛感される。なお第1位をしめたマスコミ、性教育、子ども殺し、家庭生活、家族関係、c群の興味の発達など、適切な話題を刺戟し、会の内容を盛り上げる上で有効なものと思われる。ただ発言の少ないテーマや

表-3 発言の種類と頻度 (%)

	グループ	a	b	c	全 体
教 員	質 問	5	1	5	3
	そ の 他	31	37	54	37
母	質 問	12	10	5	10
	意 見	19	19	3	16
	経 験	21	20	32	23
	そ の 他	12	15	1	10
発 言 総 数		1602	956	659	3217

表-4 討議内容と発言の種類 (%)

グループ 種類 内容	a				b				c			
	教 官	母			教 官	母			教 官	母		
		質問	意見	その他		質問	意見	その他		質問	意見	その他
養育指導	36	12	17	35	39	8	15	31	51	8	3	29
勉強遊び	29	16	22	33	30	11	25	34	61	6	6	27
マスコミ	29	12	12	47	12	12	17	59	74	0	0	26
子殺し	32	13	15	40	0	0	0	0	0	0	0	0
問題児	35	10	26	29	0	0	0	0	0	0	0	0
父母のあり方	39	11	23	27	40	28	10	22	0	0	0	0
学校の問題	46	8	31	15	35	20	28	17	60	0	4	36
発達特性	42	8	31	19	35	9	19	37	0	0	0	0
その他	38	24	0	38	25	4	21	50	61	2	1	36
計	40	6	16	23	43	7	14	35	50	0	0	50
計	36	12	19	33	38	10	19	33	59	5	3	33

表-5 1人当り発言数(平均)

人数(人) 発言者	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13以上
	25	21	20	16	10		14					
教 官	25	24	31	28	23	9	15					3
母			24	25	31	30	20	9	20	18	17	9
計												

題名であっても、それをもって両親教育の資料としての重要性が乏しいものだという事は危険であろう。

V 出席者の人数について

以上の結果の考察にあたり出席者の人数を無視してきたが、実際には教官も母も会合ごとに人数が一定していたとはいえない。4名から23名までの違いがあり、これが発言頻度に大きい影響を与えたと考えられる。また比較的発言の多い母と少ない母もみられたところである。これを考察にあたりどうとりあげていくか、ここでは検討することができなかった。将来の問題としたい。

ただ1人当り最もよく討議されたかを人類別に明らかにするため、名会合ごとに全出席人数で発言数を除き、1人当り発言数を算出した。第5表の通りとなった。これによると全体としては、4人から10人、とくに6、7人程度の出席人数の場合が1人あたり発言数が多くなっている。母についていえば、2ないし5人から6人のところが最も効果的発言がなされるといえる。出席者が多いときには、例えばレクチャアを交えた他の方法が望ましいかもしれない。

VI 会合に対する母の感想について

筆者らにとって、集団討議ははじめての試みであったが、これが母親にどう受けとめられたか、そのよき効果と改善点について、プログラム終了後アンケートをとった。回答者は極めて少なく、a群の母4名、c群の母9名にすぎなかったが、筆者らの反省すべき点も少なく

いものが見られた。今後の母の会のあり方を探る資料として簡単にふれておきたい。

まずよき効果については、いろいろな親の考えの違いと共通点がわかる、具体的な問題について話される母の体験が参考になる、子どもの心理、扱い方の理解と正しいみ方の学習、自分の疑問が理解される、母親本能の考え方、ひとりよがりの反省、原点にもどり発達を系統的にみられる、楽しく有意義にすごすことができた、などの言及があった。母の儀礼的な辞の含みも忘れてはならないが、はじめにのべた集団討議の意図がこれらの母の言葉の中に示されているといえそうである。

次に改善点としては、家庭教育について討議指導を、テーマが決まっても脱線しがちであり、もっとしほること、系統だててプログラムが進行するように、テーマについて詳しい説明を、もっと助言をすること、話し合いに慣れない母もいるから教師がリードをすること、全員がしゃべれるようにしてほしい、子どものよい点のみならず悪い点の意見交換もほしい、年長の子についての討議もほしい、親子が広く参加できるように、大学側の参加者をもっと多く、などの指摘があった。

これらの指摘からさまざまな親の要求、関心の違いを知らされるとともに、会合運営のむつかしさが痛感される。また筆者らの討議に対する態度が、母の自主性を中心としたため、計画が組織性を欠き、特定の母の要求にそえなかったことを改めて反省させられるところである。今後の実践に生かしたい。

要 約

継続的な集団討議を通じ、子どもの教育に関する母の要求と意識を探り、親の教育の手係りをえようとした。討議に際しては、母の自由な話し合いにより、母同志が互に啓発しあうところを中心に置いた。討議はさまざま

な内容につき、母の経験の敘述、質問、意見、批判などを交え、適切な進行をとり、また話題が転じ、混合するなどダイナミックな過程をたどった。

発言内容を11の項目にまとめたが、発言の多いものは、養育、指導、勉強、遊び、発達特性、父母のあり方、問題児などの順となった。しかし子どもの年齢、討議の場、人数など条件を異にする母のグループ間には、若干の差もみられた。自由な討議の雰囲気の場合ほど、母の発言も多く、話題も豊富で、質問や意見の表現も多い傾向があった。また討議に先だつテーマの設定や映画上映も討議内容に関連あり、とくに性教育、子ども殺し、家庭生活と家族関係に関するものは話題が活発であった。なお母と教官を含め、出席人数6—7人程度が1人当り討議を最も多くしているようである。しかし母の感想からは、なお集団討議のあり方について、多くの反省すべき点が指摘された。結果の整理方法の不備とともになお今後の

検討にまちたい。

文 献

- (1) Frost, J. L., At Risk, Childhood Education, 1975, 51, 298—304
- (2) Bronfenbrenner, Is Early Intervention Effective? Teachers College Record, 1974, 76, 279—303
- (3) Schaefer, E. S., A home tutoring program, Children, March-April, 1969
- (4) Brim, Jr., O. G., Education for Child Rearing, 1959.
- (5) 村山貞雄 幼児の両親教育の研究 フレーベル館, 1970
- (6) 日高幸男編 現代家庭教育概論 同文書院, 1973
- (7) 大阪府教育委員会 家庭教育学級の手びき昭和47年
- (8) 大阪市教育委員会 家庭教育学級テキスト昭和47年

Summary

This paper is the report on an investigation on the parental awareness and demands concerning the rearing of their children. It was pursued through the analysis of group discussions of mothers who have Kindergarten and/or primary school children. The different conditions of their children's age, place of discussion (at a Kindergarten or at our university), discussion process (free talk, discussion on certain theme, talk after movies and so on) made it necessary that they should have discussion in three different groups.

First of all, it should be stressed that the opportunities to talk freely helped them to reflect on their attitudes and get new perspectives. The more informal the discussion process was, the more actively they got engaged in it, and numbers of speech, topics, questions and answers, and opinions increased (especially when the group was consisted of six and seven.)

The content of the discussions, that is, the mothers' personal experiences, questions and answers, opinions and criticism, was recorded and analysed in ten items; general child rearing, learning, development, parents' attitudes towards children, influence from mass-communication, infanticide, school problems and 'others'.

It was also confirmed that the content of the discussion should have some co-relation with the themes set up beforehand and with the movies given before the sessions.